

病気の子供の「きょうだい」をサポート

子供が病気になる、親の思いはその子に集中する。それが長期入院をともなうような病気だったら、他の「きょうだい」たちは？ 病児の兄弟姉妹が、楽しく過ごせる時間をつくり、困ったこと、うれしいこと、つらいことを話せる場を増やしたいと、そのサポートに取り組む大阪のボランティアグループ「しづたね」が静かな注目を集めている。どの子もみんな大切という、メッセージを伝える。

(服部素子)

大阪の楽しく過ごす「場」提供

感情がある。大変さは比べられるものではありません。親にも、子にもそれぞれにサポートが必要です。それを知ってほしい。だから「たねまき」なんです。

病棟に入れてもらえず、長時間も廊下で待っていた。そのとき隣で二、三歳の女の子が病棟の扉に張りついて、母親を求めてずっと泣いていた。「この子のため

「シブシブ」だった。病気の子を気遣い、普段おとなしく過ごしている兄弟姉妹が走り回ったり、大声を出せるようなゲームを行うとともに、子供たちの日常の悩みや不安、だれかに聞いてほしくて話せなかったことを、口にできる

「いま、十二月に開く第二回の『シブシブ』の準備の真っ最中で、えびせんに、ソースと天かす、青ノリなんかで思いっきり絵を描いたら面白い、といった話で盛り上がっています」と笑うのは、「しづたね」の代表で社会福祉士の清田悠代さん(三三)。その横で、社会福祉士と保育士の資格を持つ会社員の眞利慎也さん(三三)と、保育士の久保尚美さん(三三)の二人のメンバーが大きくうなずく。

ちなみ、正式には「Sibling Support」と清田さん。たねまきプロジェクト。「日本では、病気の子供の兄弟姉妹は我慢するのが美德とされてきましたが、その子たちの心にも、不安や寂しさといったマイナスの

に、何かできることはないのか」。そう思ったことが原点にある。

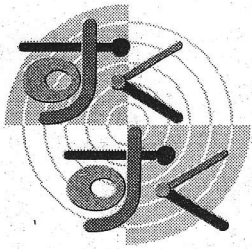
◆◆◆

大学で社会福祉の道を選んだ清田さんが三年前に出合ったのが、病気や障害など特別なケアが必要な子供たちの兄弟姉妹を対象に、アメリカで広く行われている

場としての役割を担う。今年三月、大阪で開いた第一回の「シブシブ」には、四歳から十二歳の「きょうだい」八人が参加。「緊張して固まっていた子供たちが、プログラムの終わりに生き生きとした笑顔を見せ、「きょうだいの病気はあなたのせいじゃ

ない、と言ってもらえうれしかった」と言っていたと聞いたとき、十三年越しの夢がかなったと思いましたが」と清田さん。

来月開く第二回「シブシブ」は十二日午後一時半～四時半、大阪市中央区の大阪市立中央青年センターで。募集は、病児の兄弟姉妹の小学生十二人と、「シブシブ」について学ぶ講座参加の大人五十人。締め切りは三十日まで、応募多数の場合は抽選。参加費大人五百円。小学生と家族は無料。「十二日は、きょうだいの主役の日。目いっぱい楽しんでほしい」と、三人は話している。申し込み・問い合わせは同センター(☎06・6943・5021)。



不安、寂しさ…話して笑顔に



「シブシブ」で子供たちが投げ合う「シブドール」を手に、ゲームのアイデアを出し合う清田さん(左)ら



どいぶついんぐ

イカしてるでしょ？

米サギノードで開かれたペット・コスチューム・コンテストで、60年代のヒッピースタイルにふんした5カ月のラブラドル・レトリバー (AP)